

私がこの光明園に収容されたのは、忘れもしない昭和二十二年九月二十三日朝六時前だった。収容所（今の予診室）へ着くなり四、五人の者（分館の職員並びに看護婦）が寄ってたかって、荷物や持ち金を全部取り上げたり、あげくの果に裸になれとの事である。どうするのかと反問すると風呂に入れと言うので、安心してひと風呂浴びて良い気持ちになって出た。

すると戦時中時々見かけた事がある傷痍軍人が着用していた白衣をくれるので着ると、待っていたとばかり看護婦がやって来て、大きな注射器を持って来て、右腕にちくりと差し込んで徐々に液を注入した。注入が終わって針を抜くのが早いか、全身がまるでヨーチンかアルコールでも吹きかけられたみたいに、カツカツとするのにたまげて、アッ畜生！やりやがったな、と思わず声を張り上げるところであった。

というのは、私がここへ来るようになった端緒は私のこの病気を非常に嫌い警察に密告した者があって、強制収容となったからである。出発に際し、日頃常に大変お世話になっていた人が、高齢の老人ではあったがわざわざ駅まで見送りに来てくれた。

泣きながらその老人が、

「これが、お前とは最後の別れのように思われてならないんだ。この別れの日をお前の命日として祈ることに定める」

と言いながら握った手を離そうとしないのには困惑したものであった。そして、私も一緒にもらい泣き泣かされたものであった。

今でも時たま病気があもるだけおもって、見るからに気の毒な程不自由な姿で収容になって来る新患の人を見かけることがあるが、やっぱり今もそう言う迷信（あえて迷信と言う）を信じ込んでいるのかな！とこっちが疑いたくなるのである。つまりその迷信と言うのは、一般に知られている療養所と言うところは、行ったが最後注射をもって徐徐に死に至らしめると言う噂が巷に流布され、それを本気に信じ込んでいるらしいのである。何故なら私の知り合いの老人も私に前々からしきりにそれとなく話してくれた事を考え合わせて如何なる私も好い気のものではなかった。

人間誰もが生きている限り死を恐れ嫌うのは当然な道理であろうが、私の場合、希望をなくし、生きるに望みはなく、死なんて恐れもしなければ嫌いでもなく、ただ仕方なく生きていただけだと言った方が適切であったと言えるだろう。希望をなくしたと言ったら、まだ幾分脈があることを意味するのではないだろうか。